

日々の暮らしの中から JR宝塚駅

今回は、尼崎から少し足を伸ばして、JR宝塚駅の駅舎がテーマです。宝塚駅構内は、ダークブラウンの壁と白い天井を基調としています。宝塚の歴史を感じさせ、エレガントで華やかな駅を強く意識しています。住宅地や宝塚歌劇の形成期である大正～昭和初期頃をイメージした建物で、宝塚の街並みの縮図といえるデザインにまとめられています。まず最初に目につくのは、天井の一番高い所にある大きなシャンデリアです。自由通路、コンコース、店舗の軸線の交わる部分にシンボルとして設置しています。八角柱の躯体はロータリー交差点のような印象で、集いの場を彷彿させます。電球色蛍光灯をによって温かみを持たせています。大正ロマン的な風合いに宝塚らしさを感じます。

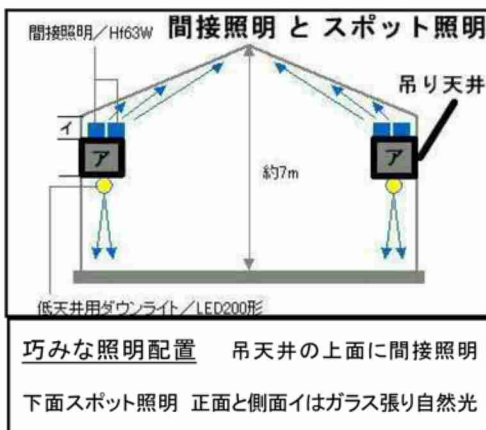
見えない所に

さて、右の各写真で他に何か気づくことはありませんか？白い天井面にはシャンデリア以外に照明が見当たりません。なのに明るい… 何故でしょうか。

両サイドに帯状に設けられた吊り天井(断面図：ア)にはダウンライトが等間隔に配置されているのがわかります。しかし、照明はこれだけではありません。見えない上面に巧みな仕掛けが隠されています。蛍光灯が複数列でセットされ、白い天井に向けてムラなく光を照射しているのです。白は光をよく反射拡散するので、構内全体を柔らかな感じで照らします。間接照明と言われる手法です。蛍光灯が見えない所にあるので高価な装飾カバーは不要な上、低電力型仕様になっています。さらに吊り天井は白い天井に比して低い位置にあるので、蛍光灯の交換が容易です。ダウンライトについては温かみのある電球色で、両サイドに配置することによりダークブラウンの壁をしっかりと照らしています。スポット照明と言われる手法です。LEDを使用することで、長寿命と省エネが図られています。

さりげない やさしさ

壁面に目を向けてみると、改札口正面は総ガラス張りで自然光が差し込んできます。宝塚の街並みと山が景色として見えるだけでなく、コンコースに開放感を持たせています。さらに吊り天井と側壁上部の間(断面図：イ)には、長方形のガラスが等間隔にはめられています。自然採光と言われる手法で、省エネなのは言うまでもありません。階段を照らすのはダウンライトですが、こちらは昼光色を採用しています。電球色に比して照度が高いことや太陽光が当たるホームとの差異を感じさせないための工夫です。ホームは白っぽく特別に舗装されていますが、これは「上に駅舎がある暗いホーム(橋上駅)」を明るくするための知恵です。光が反射拡散することで、照度はなんと従来の約2倍にもなります。停車位置から外れたホーム西端の旧舗装と見比べると、色の違いは一目瞭然です。

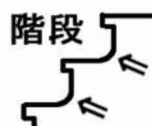


このように「直接照明(シャンデリア)・間接照明・スポット照明・自然採光」を、あるいは「切妻の白い天井・ダークブラウンの吊り天井・ガラス張りの壁面・ホームの特別舗装」を、巧みに組み合わせて配置することで「デザイン性」「機能性」「安全性」「経済性」を見事に満たしているのです。

動線を考えた設計デザイン

下りは現在単式ホームですが、将来の利用者増に備えて島式ホームに改造できるように予めスペースを確保しています。また、改札機は入口左手側が入場専用で、阪急からの乗り換え客が左側通行でスムーズに歩行できます。さらに床面を見てみるとベージュのタイルを基調に、ダークブラウンの小さなタイルがアクセントとして縦に配列されているのがわかります。この配列は、改札手前から階段付近に至る動線に沿うものです。もし小タイルの配列が動線を遮るような横並びであった場合は、通行者は歩きやすさを感じないでしょう。縦に配列することで、心地よく行き交うことができるのです。

エレベータについても、通り抜け型を採用して人の流れを潤滑にしています。階段においては各段の面には継ぎ目がなく、連続的に一体成型されていることがわかります。本来継ぎ目にあたる部分は曲面で構成され、柔らかさを感じさせてくれます。トイレは体の不自由な人や赤ちゃん連れ、身づくろいをする女性にも配慮した多目的多機能型になっています。

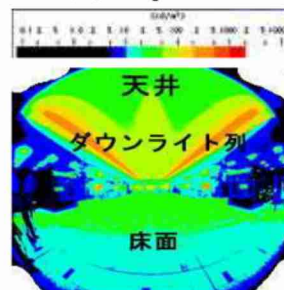


このように宝塚駅は沢山の「さりげないやさしさ」に溢れています。そして日々接していると、それらのやさしさが読み取れてきます。加えて、資料を参考に裏付けや補強を図ることで、読み取りがより確かなものとなります。



Hf63W間接照明+
FHT42Wダウンライト
(Feu値 11.74)

シミュレーション



実際の照度分布

繰り返す中で 見えてくるもの

駅のやさしさに限らず、日常的に接していると何かを感じ取ったり、推理解釈できることがあります。例えば教科書を繰り返し読むことで、教材解釈や授業展開が⇒「少しずつ浮かぶ」「見通しがつく」「パッと閃く」「感覚的につかめる」等がそうです。さらに解釈に基づき詳しい情報(指導書や参考文献)を収集・活用すると、裏付けや修正・深化が図れます。繰り返し接することで「自分なりの方法や解釈、答え」を見つけていく、そしてより確かなものとしていく…様々な情報が手軽に入手できる昨今、地道で時間がかかる手法ですが、きっと研ぎ澄まされた自分をつくることができるでしょう。

分化と集約 降ろしと吸い上げ 智の結集

さて、駅はコンセプトに基づきどのように計画され、具現化に至ったのでしょうか。駅舎は駅前の整備事業と相まってコンセプトが決められ、周囲の建物や設備との兼ね合いや機能性、接続性を考慮しながらプラン化されます。大まかには JR 西日本⇒設計業者⇒駅舎施工業者⇒各設備業者⇒業者社内のプロジェクトチームというように図式化されます。そして JR と市や業者相互で連携を図りながら分化と集約、降ろしと吸い上げを繰り返す中で、形作られていくのです。プロジェクトチームでは構想に基づき複数をプランニング、シミュレーションした後、一案に絞っていきます。さらに修正・改善が繰り返され完成度を高めていきます。したがって駅舎の素晴らしさは、智の結集の賜物とも言えます。近年においては「ひとりの力」だけではなく「みんなの力(総合力)」が必要とされることも多くなってきました。それは高度化・多様化された社会の反映でもあり、学校も例外ではありません。